

新規就農者育成に力こぶ

兄弟で経営統合し法人化



石川 加賀市 リーフファーム加賀
加賀市

【石川】「経営規模を拡大し加賀市一の農家をめざしたい」。そう力強く語るのは、兄弟で複合経営に取り組みリーフファーム加賀(加賀市)代表取締役の兄・西山匡亮さん(37)と取締役の弟・中田徹さん(33)。匡亮さんは2010年に就農し、米、大豆、ブロッコリーなどの生産を開始。徹さんは17年に梨栽培で新規就農した。兄弟で別々に経営していたが、規模拡大に伴い「労働力確保」という共通の課題が生まれたことで、22年に2人で同社を設立した。

同社は新規就農者の育成に積極的で、現在は雇用就農資金を活用し、2人を正社員として採用。うち1人は10月から独立就農する。また、地域おこし協力隊制度を活用し3人を受け入れ、隊員は任期終了後、新規就農することになっている。

匡亮さんは「産地とともに発展する農業」が当社の経営理念。地域が元気になるために今後も新規就農者を育成して地域農業の発展に努めていきたい」と話す。

新潟「持続可能な循環型有機質肥料研究会」 下水汚泥から肥料、製造施設を視察



肥料の製造施設を視察する参加者

【新潟】「持続可能な循環型有機質肥料研究会」(秋山敦会長)は8月7日、下水汚泥の肥料としての利用拡大を図るため「菌体りん酸肥料活用研究会」を長岡市で開いた。県内初の試みで、主な化学肥料の原料をほぼ全量輸入に頼っているわが国だけに、国内資源の有効利用に注目が集まっている。

菌体りん酸肥料は、汚泥資源を使用した肥料のうち農水大臣の承認を受け生産される肥料で、2023年10月に公定規格として創設された。定期的な成分分析が義務付けられており、品質管理を徹底することで、肥料成分の保証、他肥料との混合が可能となる。

研究会には、県や長岡市・農業者など関係機関・団体から30人が参加し、同肥料を製造・販売する緑水工業(株)(長岡市)の製造施設の視察や、利用拡大に向けた情報交換会を行った。

交換会では、新潟食料農業大学が行っている実証試験の紹介のほか、実際に同肥料を使用した農業者から作物の生育結果が報告された。

出席者からは「枝豆に施肥したが、食味が向上した」などといった意見が出された。

「女性の力で地域農業守ろう」 兵庫・多可町農委会 女性委員が活躍



【兵庫】県中央部に位置する多可町の農業委員会(会長は、神戸市、丹波篠山市と並び県内最多の女性委員5人が在任中で、女性性の活躍を通じて地域の農地と農業を守ろうと取り組んでいる。

4月19日に初めて開催した草刈り講習会も女性委員の提案で実現した。同講習会には町内外から35人(うち女性30人)が参加し、JAみのり加美農機センターの女性職員が講師となって、初歩からの実習と安全講習を実施した。

8月23日には農業委員・農地利用最適化推進委員・事務局34人が8班編成でドローンなど先端技術をいち早く取り入れた。

22年にはライスセンターを新設。先端機器の導入で効率アップを徹底し、日量70トンの米の出荷を可能とした。

「農業施設にも納税猶予を」 名古屋市農業委員会



【愛知】名古屋市農業委員会(布目己佐子会長)は7月17日、「令和8年度名古屋市農業施策等に関する意見書」を同市の広沢一郎市長に手渡した。

名古屋市の農地は、農産物の供給のほか良好な景観の形成、災害時の防災空間など多様な機能を有している。農業委員会はその維持に必要な施策を意見書にまとめた。

意見書では、①遊休農地の発生防止・解消の農業基盤の維持・整備③人材育成④地産地消の推進⑤税制――の5項目について市政の取り組みを求めた。

税制については、農業を継続するうえで最も重要な課題であり、農地に係る相続税納税猶予制度を農業施設にも適用を広げるべきと要望した。

京都・木津川市農委会 市内17地域で「農地農業相談」 地元の農委、推進委が親身に対応



相談に対応する岡田一良委員(左)と福井健二委員(右6日、木津・木津町地域)

【京都】木津川市農業委員会は、7月から市内17地域で「農地農業相談」を実施している。2カ月に1回開催し、地区担当の農業委員と農地利用最適化推進委員が地元の集会所などで農家からの相談に応じている。

初回の7月には、「耕

長野・茅野市 蓼科野菜ブランド化へプロジェクト ランチ会、シェフの料理でPR



【長野】「蓼科野菜」のブランド化をめざす茅野市は、今年6月にプロジェクトをスタート。認知度向上を図ろうと7月26日、同市内のレストランで消費者を集めて「七夕月の彩ランチ会」を開き、市内と近隣から30人が参加して蓼科野菜をふ

サラダバーで「収穫」するランチ参加者

んだんに使った料理を楽しんだ。

メニューは、皿の上で「収穫体験」をしてもらう「蓼科野菜のサラダバー」や「地粉のペンネ夏野菜ジエノベーゼ」など蓼科野菜の素材を生かした9品。参加者はメニューと調理を提供した日井健シェフから解説を受けながら味わった。

参加した女性は「生で食べても味が濃くてすごくおいしい。見かけたら絶対買いたい」と感激していた。

先端技術で効率化徹底

担い手不足、スマート農業で補う

岐阜・羽鳥市
深耕ファーム

【岐阜】羽鳥市で水稲76畝をはじめ、100畝規模の経営を行う深耕ファームは、山田和也さん(27)＝写真＝を中心に、ICTやスマート農業導入で効率化と安定生



産に力を入れている。同ファームは2014年に設立。個人で農業をしていた父親の作業受託が増加したため、会社経営に組み込んだ。山田さんは19歳で同ファームを任され、ICTやライスセンター新設などに挑戦してきた。

担い手不足を見越して、誰でも作業がこなせるようGPS搭載トラクターや田植機、農薬散布

石積み階段園みかんシステム 世界農業遺産に認定

和歌山
有田・下津地域

【和歌山】県が参画する有田・下津地域世界農業遺産推進協議会から国連食糧農業機関(FAO)に申請していた「有田・下津地域の石積み階段園みかんシステム」がこのほど、世界農業遺産に認定された。

システムは、400年以上前から取り組まれて

中日本版

各地の話題